金銀銅三色揃い踏み？の巻

京都で有名な見学場所といえばどこでしょうか？と聞けば、「金閣寺」という答えが多く返ってくるかと思います。確かに、金閣はその風情・ビジュアル等々含めて京都を代表する名所と言えます。ただ、気を付けなければならないことがあります。それは、京都に「金閣寺」という寺院は存在しないということです。通称が一般化してしまった典型的な例ですが、この寺の正式名は「北山鹿苑寺」で、その境内にある舎利殿が「金閣」というわけです。金閣寺という単独のお寺ではなく、あくまでも北山鹿苑寺の境内にある建物の一つということになります。

ですので、正しい呼び方は、「鹿苑寺金閣」ということになります。室町時代、幕府三代将軍であった足利義満が山荘・別荘として極楽浄土の世界を庭園・建築で表現したもので、北山文化を象徴するものとなっています。その姿はまさに豪華絢爛、二層と三層に貼られた金箔の輝き、屋根の上の鳳凰、そして周囲の緑に溶け込むように鏡湖池にその姿を映すさまは、まさに名所と呼ぶにふさわしい情景を現出しています。

これに相呼応するように登場するのは、「銀閣」です。こちらも金閣と同じように、「銀閣寺」という寺院があるのではなく、「東山慈照寺」の観音殿が「銀閣」ということになります。こちらは八代将軍の足利義政によって造営されたもので、華やかな北山文化の象徴である金閣に対して、渋い侘び寂びを重んじる東山文化を代表する銀閣。

静かな庭園の中にたたずむ姿はしっとりとした落ち着きのある風情を感じさせてくれます。ところで、素朴な疑問として「金閣は金色なのに、なぜ銀閣は銀色じゃないの？」ということはよく言われますが、これには、元は銀箔が貼ってあった説や、資金難で銀箔が貼れなかった説、東山文化の渋さの象徴で端から貼る気がなかった説などがあって諸説紛々です。いずれにしても銀閣の良さは、周囲の庭園に溶け込んだ「静の美」であるということのようです。

ところで、金・銀といえば、ついつい五輪の表彰台をイメージしてしまいますが、金閣・銀閣があるなら、もしかして「銅閣」もあるのでは？という疑問も当然湧きおこってきます。

実は「銅閣」といわれるものが、祇園に存在します。丸山公園から維新の道まで、古き良き京都の雰囲気を残している豊臣秀吉の正室の名を冠した「ねねの道」、その途中に「龍池山大雲院」という寺院があります。この大雲院の境内には「祇園閣」と呼ばれる祇園祭の山鉾をモチーフにして作られた長いとんがり屋根の建物があります。基本的には鉄筋コンクリート造・三層構造の近代的な建物で、非公開ということもあってあまり定着はしていませんが、屋根が銅板葺きであることから「銅閣」と呼ばれています。さまざまな珍しい石材が多用されていたり、内部に敦煌の壁画が模写されていたり、奇獣の照明がぶら下がっていたりと、金閣・銀閣とは若干趣を異にしてはいますが、とりあえず三色揃い踏みということはできそうです。

北山文化の象徴としての金閣と、東山文化の象徴としての銀閣、京都市内北側見学地の双璧をなすこの二つは、どちらも日本古来の美を象徴する存在として、多くの人々の心を惹きつけています。